

アフリカ人目線で日本社会を捉える

佐々木 タ子

■ 参加者

ラミン・アルカスム (Lamine Alkassoum)：ニジェール共和国アガデス出身。アブドゥムームーニ大学（ニアメ市）卒業後、ドイツの NGO「マーケティングソシアル」に所属し、ニジェール国内でのエイズ予防活動、安価で活用しやすいコンドームの企画販売を同国内で展開。その後、国内の保健・医療・環境などの調査を担うコンサルティング会社「CNESS」で調査員、放牧民（トゥアレグ族、プール族）や商業移民のエイズについての調査を行う NGO「SISSET-NOMADE」の調査員などを遍歴。現在は茨城県牛久市で妻、佐千子さんと共にカフェ・アガデスを営む。（株）アガデス・トレーディング常務取締役。

牧野 佐千子：千葉県流山市出身。早稲田大学第一文学部卒。2005 年から読売新聞東京本社にて編集記者。2009 年から 2 年間、JICA 青年海外協力隊・村落開発普及員としてニジェールへ派遣。2012 年にニジェールの物品の輸入販売などを行う（株）アガデス・トレーディング設立。現在は、アルカスム氏と共にカフェ・アガデスを営みつつ、地域の人々を対象に料理教室、ワークショップ、手づくり市などを開催し、様々な活動を繰り広げている。

佐々木 タ子：神奈川県横浜市出身。2003 年に JICA 青年海外協力隊・村落開発普及員としてニジェールの農村地域で活動し、2005 年からはグループ派遣隊員のリーダーとして村落地域で活動する隊員の活動支援や取りまとめなどを行う。その後京都大学大学院に進学しサヘル地域の人々の暮らしや生業、農村における情報伝達構造など、フィールド調査を通して明らかにした。現在は「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクトの研究員として西アフリカ（ニジェール、ブルキナ、トーゴ）、南部アフリカ（ナミビア）で調査、研究を継続している。現所属は国際協力機構ニジェール支所企画調査員（2015 年～）。

中川 千草：三重県出身。「地域環境知形成による新たな commons の創生と持続可能な管理」プロジェクトの研究員。主なフィールドである三重県熊野灘沿岸部（2003 年～）、ギニア沿岸部（2008 年～）、マラウイ湖南西部（2014 年～）において、海辺に暮らす人びとの環境観や地域づくりについてのフィールドワークを実施してきた。地域資源の利用と管理、それを支えるコミュニティのあり方、ネットワーク形成に注目し、フィールドワークで得られたデータをもとに、環境社会学および民俗学的視点から考察している。最近では、西アフリカにおけるエボラ出血熱の流行を受け、社会的危機とコミュニティ・レジリエンスに関する研究活動をはじめた。現所属は龍谷大学農学部食料農業システム学科講師（2015 年～）。

紀平 朋：総合地球環境学研究所・「砂漠化をめぐる風と土と人」プロジェクト研究推進支援員（記録・撮影）。

■ はじめに

日本社会の少子高齢化、人口減少、過疎化といった問題は世界にも類を見ない勢いで進んでおり、地域社会における人々の繋がりは希薄になったと言われて久しい。その解決策の一つとして、主にアジア諸国からの移民に対する門戸を広げるという対処策が取られているはいるものの、その敷居は未だ他の OECD 諸国と比較すると圧倒的な遅れをとっている。また既に日本で生活をする外国人からは、言葉や文化の相違が大きな障壁となっているという声をよく耳にする。さらに最近では、韓国や中国人移住者に対するヘイト・スピーチが国際的な問題として指摘されるなど、日本人の外国人に対する意識はネガティブな方向へと向かい、その寛容さを失いつつある。このような点から鑑みると、日本政府の少子高齢化対策、移民政策と一般の人々の意識の間にも大きな隔たりがあるように見受けられる。

他方で日本の社会とはいわば対局ともいえるアフリカ諸国においては経済、社会保障、医療、教育分野などで様々な問題を抱えてはいるものの、特に地方において人々の繋がり、絆は強く、老人や障がい者といった社会的弱者を地域で守るという機能がインフォーマルなたちで機能している。

このようなバックグラウンドを持つ人々から見た日本社会は一体どのように映るのか、それを忌憚なく語ってもらい、そこから日本社会の未来を形づくるヒントを得ようとするものである。

■ 対話の記録

【実施場所：茨城県牛久市（カフェ・アガデス）、日時：11月6日、会話は全てフランス語】

佐々木：この座談会の主旨については、こちらに書いた通りですが、そもそもなぜこのような座談会を実施したかったかといえば、博士研究の際、ニジェールの研究所（ICRISAT）で出会ったイタリア人学生との他愛無い会話がきっかけです。彼女はドイツの大学の博士課程でニジェールに来ていました。彼女の研究室には多くのアフリカ人学生もいて、そのうちの一人の女子学生が、ドイツで起きた痛ましい事件にショックを受けていたのです。ドイツも日本と同じく高齢化が進んでいますが、独居老人が死後1週間後に発見されたという事件でした。このニュースに対するアフリカ人学生の表現が、今でも忘れられないと、イタリア人の彼女は話してくれました。アフリカ人学生は「この世の終わりだ。」と吐き捨てるように言っていたそうです。アフリカで、このようなことは聞いたことがないと。

私は長くニジェールの農村で暮らし、人々の生活を間近で見してきました。確かに食料、医療、教育面で様々な問題を抱えていますが、地域コミュニティ、人びとの繋がり是非常に強く、互助の精神が機能しているように見えました。このような側面は現代の日本社会に欠けている、そして学ぶべき点だと思います。

ラミンさんは、そんなニジェールから日本に来て今こうして生活しています。これまで様々な日本社会の負の側面を見てきたと思います。そこで、こうした問題を解決すべくアフリカ社会のアイディアを伺いたいのです。確かに日本とアフリカとでは、文化的にも歴史的にも様々な面で異なるので、全く同じようにはいかならないと思いますが、特にアフリカの農村における社会コミュニティの機能から多くを学ぶことができると思うのです。そのために、今回このような機会を設けました。

ラミン：よくわかりました。とてもいい動機、イニシアチブだと思います。この機会を利用して私の経験などお話ししたいと思います。皆さん、京都からわざわざ牛久まで来て頂いたわけですし・・・。

またこの機会に、あなたがニジェールの村人と一緒に長いこと生活し、共に働いてきたことに敬意を払いたいと思います。あなたがニジェールの農村で様々な経験をし、そして母国日本に帰って来て、アフリカでの経験を日本社会のために活かせないかという考えに至ったということ、それがまずとても重要なことであると思います。それはアフリカに限らず、どこか知らない土地に行って、良い面、悪い面を見て、経験し、そこから良い面を集めて、自分のいる社会に還元しようという試みはどこにおいても非常に大切なことです。とても素晴らしいことです。

この座談会の主旨はよく理解できました。まず、日本社会の高齢化の問題があると思います。そして、高齢者が孤立しているという問題もあります。それに対して、アフリカ社会は、確かに貧困という問題はありますが、特に村において、老人は周囲の人々に守まれ、よく面倒をみてもらっています。あなたが投げ掛けた質問は、どのようにこのような方法、文化を日本社会に取り入れていくか、取り入れていくことができるか、ということだと思います。ここ日本で、私が経験したことから高齢化の問題を考えてみたいと思います。アフリカについては、あなたが既に様々な経験を経てきているので、あまり詳しく説明するまでもないでしょう。まず、日本の老人がどのような生活を送っているのか、私がこれまで洞察してきたことを述べたいと思います。どのような印象を抱い



写真1 座談会の様子（カフェ・アガデスにて）

たかという、これは社会がここまで発展してきたその結果によるものだと思いますが、先進国特有の、発展の故生じた問題だと思います。まず先進国の人々は医療の発展により長く生きることが可能となった。もちろんそれは悪いことではありません。アフリカと比較すれば、アフリカ人よりだいぶ長く生きていることになります。より多くの人が長生きをし、アフリカのような貧困もない。老人人口が多いことが問題なのではなく、社会的価値観の問題だと私は思います。アフリカの、特に農村の社会を見てみると、今日に至るまで社会は依然伝統的です。文化的、精神的な価値観が伝統に根付いているのです。日本で例えるなら、200年前に文化や伝統が今も社会に息づいているということです。日本も、そのような時代が確かにあったと思いますが、ニジェールの農村では今も昔ながらの伝統や文化を大切にしているのです。その文化の中には数多くの神話があります。神話とは何か、例えばニジェールの村では文化的、精神的価値観が色濃く残っているとお話ししましたが、精神的価値観とは、物質的な価値観とは異なり目に見えるものではなく、人々が信じていることなのです。なので、何の補償や証もありません。それが神話です。もしくはドグマとも呼びます。それが伝統的な社会や伝統の中に今もあるのです。そして、その伝統的な社会においてある諺があります。ザルマ語では、"Boro Zeyno, Borokulu wone no"（＝老人は皆のものだ）。年寄り、社会の財産である、という価値観が社会の人々の共通概念として頭の中にあるのです。これはもう、議論の余地はありません。ひとりの老人を、たとえあなたの家族の一員でなかったとしても、一人の隣人として助けなければならない。これは私たち全てのニジェールに課せられた義務であるのです。これは一人一人の精神的、伝統的な義務となっているのです。「老人の世話をする」ということが、全てのコミュニティにおいて義務なのです。

佐々木：それは都市においても言えることですか？

ラミン：なぜ村の話から始めたかという、残念ながら経済的な自由主義、資本主義の下、アフリカの都市も現在変わりつつあるからです。しかし、村においてはまだ、毎回何かを食べるために小銭を探す必要はない。水を飲むためにお金を払う必要はない。村には井戸がある。朝、水汲みに行きさえすれば、水は手に入ります。それらの対価を払う必要はない。それと同じように、誰かの面倒をみることは、対価を払う対象ではないのです。しかし都市は違います。家族を養うために十分なお金がないなら、まずそのために仕事を探さなければなりません。老人が一人で暮らしている場合だってあります。そもそも、都市の生活と村の生活は異なります。しかし少し前までは、都市も村もほとんど変わらない生活を送っていたというのもまた事実です。都市の人々も村の人々と同じように老人の世話を普通にしていました。しかし、今日、都市においても共同体の精神、ドグマ的な考えが常に人々の頭の中にあるのです。それが日本の都市とは大きく異なる点です。ニジェールの都市において、例えば、老人の世話をすることなく、朝仕事へ出かけたとりすると、その人は常に罪の意識に苛まれます。だから『明日こそは、その老人の面倒を、仕事に出かける前にみなければ』という考えに至るのです。そのような考えは、今でも都市の人々の頭に残っているのです。たとえそのような時間的余裕がなかったとしても。村人には、時間的な余裕があるし、誰かしら老人の面倒をみってくれる人がいる。だから、都市においても、村においても老人は常に大切にされているし、彼らを不当に扱うことはありません。そして人々はそれに対してある結果がもたらされると考えます。例えば、老人を大切にしなかった場合、その村に神から罰が下されると考えます。そのため、人々は神を畏れ、老人を大切にしているともいえます。

佐々木：それは村においても都市においても？

ラミン：そうです。その両方で言えることです。

そういう意味で、宗教的（イスラーム）な神の存在、イスラームの影響は大いにありますが、それも含めて、精神的と表現しています。この精神的な側面が、人々に神を畏れさせ、その罰を受けないために人々は、老人を大切にしているのです。その罰というのは、さまざまなかたちで人々に降りかかります。時には人々の命を奪ってしまう。例えばある村で1年雨が降らなかったとする。そのために、その年の穀物の生育や収穫が悪くなかったとすると、人々は、『この村で何か悪いことをしたのだろうか、それともやらなければならなかったことを怠ってしまったのだろうか？』と考える。人々はその村に対する神からの罰と捉えるのです。例えば、ある老人に酷いことを言ったり、親切にしなかったりした後で、その老人が亡くなったとする。そうすると、その人は神からの罰を畏れ、その老人に正しい行いをしなかったことを後悔するでしょう。だから、人々はその罰を何よりの証拠として信じ、善行に勤しむのです。その精神的、文化的、伝統的側面が大きく社会に影響しているのだと思います。

それでは今度は社会的側面に目を向けてみましょう。アフリカ人は皆、社会というより、コミュニティの中で生活しているのです。ここで、ハウサの諺を挙げてみましょう。“Mutoun ba mutani banzani”. ザルマ語だったら、“Boro kansinda borey, yamo no” 直訳すると、「仲間がいない人は、価値がない」これは、恐らくアフリカの全ての民族にある諺だと思います。これはアフリカの社会的な側面をよく表しています。だから、人々は『自分は社会の中で一人ではない』と感じるし、『自分たちみんなが社会の一員である』と感じているのです。そのため、隣人に起こる全てのことが、自分たちにも起こっていると感じるのです。例えば、隣人が食べるものがなくお腹を空かせていれば、自分の食べ物を分け合おうと思います。自分一人で食べる権利はないと感じるのです。もし隣人が何かで苦しんでいれば、その場に行って手助けしなければと思います。それができないのであれば、自分は社会の中にいる意味はありません。もしも、社会の一員ではなくたった一人で生きていたなら、何か問題が起きた際に容易にその人の人生は崩れてしましますが、社会の一員であれば、そう

簡単には崩れません。

アフリカ社会、特に農村では、男性なら16歳で成人とみなされます。畑仕事を始めるのもこの年ですし、結婚もできます。女性の場合はもっと早く、13、14歳で成人とみなされます。結婚できると言いましたが、それはすぐに二人で生活を始めるというわけではありません。宗教的な理由から、あちらでは性的な自由というものはありませんから、結婚前の性行為を防ぐという意味もあって、早くに結婚する（させられる）風習があります。現在はそうした風習が守られないという場合も多々ありますが、表向きは禁止されています。13、14歳で結婚した女性は、まずお婿さんの家族と一緒に暮らします。村では、お祖父さんもお祖母さんも孫も皆が同じ敷地内で暮らし、各世帯はそれぞれ藁ぶきや土壁の家で寝食を共にしています。そのような居住形態は、アフリカ社会のコミュニティにおいて非常に大切です。なぜならこのような家族がコミュニティの基本となるからです。そこからコミュニティは始まるのです。結婚して新しい家族に迎えられたお嫁さんは、まずお婿さんのお母さんの家で実の娘のように寝食を共にします。そのため、お婿さんも結婚してすぐにお嫁さんに触れることはできないのです。それを決めるのはお婿さんのお母さんなのです。その時期がきたら、まずお婿さんのお母さんが、お嫁さんの両親にそれを伝えるのです。そこで儀式を執り行い、初めて新婚の二人の家を建てるのです。このような段取りでことは進みます。このように結婚一つとっても、コミュニティ的、社会的要素が非常に強いのです。お嫁さんは、お姑さんの娘ではありませんが、お姑さんが年老いたとき面倒を見るのはお嫁さんです。お嫁さんの側にしても、嫁いですぐに姑さんとは親子のような関係ができていくので、お姑さんが年老いてから面倒を見るということに何の抵抗もありません。その後、二人の間に子が授かると今度は、お嫁さんの叔母さんの家にその子を預け、その後お嫁さんの両親のうちで育てられる場合もあります。そうすることで、その子にとっては、お嫁さんの家族（祖父母）が本当の家族のようになります。このように、村社会ではコミュニティの中で子どもは育っていくのです。こうして結婚だけでなく、生まれてくる子どもが複数の家族を結びつける役割を担っていくのです。さらに、村全体が結婚という縁と精神的な繋がりによって一つの大きな家族となっていくのです。その繋がり是非常に強いものです。

一方で、そこに物質的なものが入り込むと、自由主義、個人主義が形成されてしまう。例えば井戸をコミュニティで設置しようとすれば、当然建設や修理にお金が必要になってくる。それは彼らの生活を改善するために必要ではあるけれど、水に対してお金を払わなければならない。水は、もはやタダではなくなってしまう。お金がなければ水も買えない。そして、そこから個人主義は始まる。お金のない人を手助けする人が出てきたとしても、払い続けていくうちに『自分はお金を払っているのに、なんで人の分まで払わなければならないんだ！』と思い始め、それを口にする。そうしたことから社会に不協和音が響きだす。その結果、コミュニティも細分化していつてしまう。しかし、このような物質的なものの導入によってコミュニティが細分化してしまったとしても、人々の精神的な側面は依然として強い。お金がなくて払えない人を厄介払いした人は、このような行為がいずれ自分に災いを招いてしまうと考えます。だから、たとえそれによって自らの死を招いてしまっても、人々と分かち合わなければならない。たとえお金がなくて水が買えなくても、水を分け合わなければならないのです。

佐々木：それほどまでに強いのですか？

ラミン：はい。とても強く働きます。特に精神的な面が非常に強いので、社会で人々は助け合い、協力し合うことができます。

また、後であなた方からの質問を受けるとして、まずアフリカと日本という二つの社会を比較してみましょう。私の経験から日本社会の、特に高齢化の問題について所感を述べると、確かに日本では多くの老人が、老人ホームという施設に入り様々なケアを受けています。そうした施設でのケ

アは行き届いているかもしれませんが、彼らの世話をするスタッフはお年寄りの家族ではありません。そこがまずアフリカとは大きく異なります。しかもそこに入るために、お金を払わなければならない。お金を払わなければそうしたケアを受けられないということだけでなく、施設に入るお年寄りの精神面についての配慮が足りていないように感じます。それが我々アフリカ人からすると理解に苦しみます。施設に入る老人は精神的にも疎外感を覚えるでしょう。まるで世の中から見捨てられたとを感じるのではないのでしょうか。アフリカでは、そのような疎外感を感じさせないために、お年寄りは家で世話をします。お年寄りは赤子のようなものです。若いころは何でも自分一人で行ってきたのに、ほんの些細なことですら自分一人ではできなくなってしまう。このようなことから、老人は容易にフラストレーションを抱えてしまいます。そのため、私たち若い世代も、老人のやることなすことにいちいち口出ししません。大したことではないと受け流すので、老人もそれに対してフラストレーションを感じないのです。日本では、まず家を出て施設に入ります。そこはもちろんタダではないで、お金を払います。既にそこに経済的な負担が生じます。金銭的な余裕がない場合は、老人が行き倒れるしか道はありません。それは明らかです。

佐々木：そのようなみじめな生活を苦に自殺をする人もいます。

ラミン：フラストレーションが限度を越してしまうと人々は自殺という道を選んでしまう。これは哲学者のカントや社会学者デュルケムが彼の著書『自殺論』でも書いていることです。自殺をすることで平穏を得ようとするのです。たとえお金があつて施設に入れたとしても、老人自身は『なぜ子ども達は私に会いに来ないのだろう？』とか『なぜここで私を一人にするのか？』とかいろいろ考えてしまうでしょう。

佐々木：親を施設に入れた子ども達にしても、恐らく罪悪感みたいなものを多かれ少なかれ感じるのではないのでしょうか？

ラミン：その通りだと思う。また、路上生活を強いられている人々を時々目にしますが、彼らに対する周囲の態度は冷たいものです。子どもがそういった人たちに罵声を浴びせているのも目撃したことがあります。バカ、とか気違いとか…こういった人たちは、体を休める場所すらない。非常に苦しい状況下に置かれています。そんな状況でも、なんとか生きていくために働かなければならない。誰も助けてはくれないから。あるいは、家族も身寄りもなく一人で暮らしている老人はたくさんいます。その中には病気で働けない人もいるし、たとえ健康でも死ぬまで働かざるを得ない人々です。私はここで暮らしていく中で、老人の友達ができました。彼は、子ども達が遠くで暮らしているため一人暮らしで、唯一家族と呼べるのは飼い犬のみです。彼はいつも疲れています。以前、犬は2頭いましたが、今では1頭のみです。犬も年老いています。彼の生活自体、決して楽ではなさそうなのに、どうやって犬を養っていけるでしょう？現に犬だって痩せこけています。日本は犬の食べ物さえもお金を払わなければならない。ニジェールだったら、犬は街や村のいたるところで生活していますよね？あちらでは犬のためにドッグフードを買ったりしません。日本なら、犬の食料はもちろん、散歩も必要だし、犬の糞だってちゃんと処理しないと隣人に文句を言われてしまう。犬の糞をきちんと処理するのはいいことだとは思いますが…時にはそれが病気の原因にもなりますから。だからニジェールはいろんな病気が蔓延してるのかな（笑）。

とにかく、その老人は現在も生活のためにパートタイムの仕事をしています。いつも彼を見かけると大変疲れた様子です。誰も助けてあげる人はいないのです。40日間くらい、ずっと挨拶をしない隣人もいます。日本の生活はそういう意味で、とても物質的で、金銭至上主義だと思います。そのため、人々は生きていくために一生懸命働き、老後のための蓄えを怠りません。誰かの面倒をみるということはそれだけで、新たな重荷となってしまうのです。これが物質的な問題。次に、精神的な問題について見てみましょう。日本において何かを信じるということが、アフリカのように

強くない。それを宗教に置き換えることもできますが、こうしなければいけないという宗教的な義務が強くない。

佐々木：まあ、無信教徒みたいなものですね。

ラミン：もしこれをやらなかったら天罰が下る、みたいな感覚がないと思います。それがそもそも問題。そういった精神的な拠りどころがない。これが精神的な側面で、アフリカとは大きく異なります。

私は日本に来て3年になります。多分、5年、10年日本に住み続ければ日本社会についてもっと客観的な分析ができると思います。社会学的な分析をするためには常に観察することが必要です。3年という期間は、観察するにはちょうどいい長さかもしれません。でも3年では日本社会を分析するには十分ではないと思います。でも、3年の日本滞在で、他のOECD諸国と比較すると日本人は順応するというのに非常に長けた民族だと思います。

佐々木：順応性とは？

ラミン：日本人はまず非常に優れた観察者です。例えば、日本人が何か新しい技術に遭遇したら、それと全く同じ技術を再現することができ、さらにそれよりも優れた技術を生み出します。それらを改善する。それは全ての日本人に当てはまることだと思います。その順応性の高さは日本の愛国心にも通じるものがあります。それから規律を重んじる人々だと思います。とてもまじめな民族です。社会的側面を見てみると、その変遷の過程でそれら3つの特徴は非常に重要だと思います。ある社会を理解するときにその特徴をまず捉えることが必要だと思います。例えば、とても規律を重んじるという国民性なので、何かを提案しそれが大多数の人々に受け入れられればそれに対して同意が得られやすいけれど、もしそのような特徴がなければ、その返事は曖昧なものになるか、あるいは拒否されるでしょう。その規律を重んじる、まじめな国民性ゆえ、もし教育過程で「お年寄りを大切しましょう」と教えれば、それは実践されると思います。よい例を人々に示せば、「じゃあ、私たちもやってみよう」という具合に機能するのではないかと思います。次の特徴として、順応性を挙げましたが、例えばどこかで実践したことがうまくいった際、こちらでも試してみようと考え、そしてそれがうまくいく。そもそも日本は自然とうまく調和しながら生活してきた歴史がある。あらゆる自然災害に遭いながら、それに対処してきた。津波や地震など、別の地域ではそれを世界の終りと捉えられるような甚大な自然災害です。そんな中、日本人は生き抜き、それに順応してきた。これは素晴らしいことです。だから、どんな技術にせよ、知識にせよ、日本人は受入れ、順応する能力を持っていると思います。なぜならこうした自然と常に対峙してきたので、順応性は非常に高い。人々はこんな危険な場所から移住しようとは考えず、常にそうした自然災害と向き合ってきている。それは非常に重要なことです。

3つ目の特徴として、愛国心の強さを挙げました。それがニジェールでいうところの、社会コミュニティの強さなのだと思います。先に挙げた諺「仲間がいない人は価値がない」に共通するところが日本の愛国心にあると思います。『私たちは日本人』『祖国のために』というアイデンティティがそれです。たとえ実際の社会では人々はバラバラに見えても、日本人というアイデンティティで一つになることができる。

佐々木：あなた方にはこのような愛国心はないのですか？『私たちはニジェール人だ』というアイデンティティは？

ラミン：もちろんあります。ただ歴史的な背景が日本とアフリカでは全く異なります。日本は社会的にほぼ単一の民族で変遷を重ねてきました。確かに第二次世界大戦という歴史的なイベントはありましたが、大きな分裂などは殆ど起こらなかったといえます。ニジェールの社会というより、アフリカ社会としてとらえると、日本とは異なり、外部から様々や侵略や破壊がもたらされた歴史がある。それにより社会的な発展は阻害されてしまった。まず奴隷制が挙げられます。これにより社会制度が

破壊されてしまった。その後、アフリカはヨーロッパ諸国の植民地政策により分断され、さらに社会制度も侵害されてしまった。

佐々木：「破壊」されたのではなく？

ラミン：「破壊」という言葉は強い意味だし、断言することは私にはできないので、敢えてここでは侵害されたという言葉を使いたいと思います。

佐々木：それでも、多くのアフリカ人が「西洋人によってアフリカの歴史や文化は全て破壊されてしまった」と強い口調で言っていますよね。

ラミン：確かに多くのアフリカ人がそのような発言をしています。でも、歴史的な出来事に対するとらえ方は人それぞれで、各々の責任、専門の問題だと思います。一つの言葉をとっても様々な解釈の仕方がありますから。話を戻しましょう。奴隷制度に続く植民地支配によって、既存のアフリカ社会の構造が侵害されてしまいました。植民地支配後に起こった第二次世界大戦は、アフリカだけでなく、日本を含む多くの国々に被害をもたらした。我々は同じ第二次世界大戦の犠牲者です。その結果アフリカで何が起きたか、ベルリン会議において西側の列強国により大陸の分割が実施された。まるで、ケーキを切り分けるように。それ以前は、アフリカにおいても同民族間で同じ文化、価値観を共有し、社会が形成されつつありました。こうして西側諸国の利害関係により国境線が引かれてしまった。そうした歴史的背景があるので、ニジェール人というアイデンティティが持てない。これは当然の帰結でしょう。そしてその分割後、独立を果たしたものの、人々は旧宗主国や西側諸国に翻弄される情勢に疲れ果ててしまったというのが現状です。このような状況で、愛国心を醸成することは不可能でしょう。このような背景から、あなた方日本人がもつ愛国心とは少し異なることが分かってもらえたと思います。確かに、愛国心があるにはあると思いますが…

佐々木：それではここで最初のお題に戻しましょう。あなたがとてもよく日本社会を観察してきたことが分かりました。私は日本人なので、ニジェールと比較すると、どうしても日本社会の悪い面ばかりが目についてしまいます。ただそれを批判するばかりでなく、どうにか現状を改善していきたいと思っています。そのために、私自身のアフリカの経験も活用できればと考えています。ただあまりにも問題が漠然としているので、ここでは特に日本の高齢化の問題に絞って議論を進めていきましょう。この問題にどう対処するべきでしょうか？

ラミン：どんな問題でもそうですが、まず自分たちができることから始めるべきでしょう。まず個人レベルで考えましょう。

佐々木：たとえばどんなことが考えられますか？

ラミン：たとえばあなたは、既にアフリカでの経験がありますよね。まずあなたの家族や、あなたの周りでお年寄りがいるなら、その人にアフリカ的アプローチで接してみてもどうでしょうか。まずそのお年寄りの話を聞きましょう。たとえば、毎朝ほんの少しの時間でもその人のところへ行ってお喋りをするとか、もしその人が何か必要ならそれをしてあげることです。何らかの手助けが必要なときにそれをしてあげることがとても大事です。そうすることで、お年寄り自身もあなたが他の人たちとは違う存在であることに気づくでしょう。そして、あなたと出会ったことを他のお年寄り友達に話すかもしれません。これは一つの例ですが、こうした個人レベルの行動がまず挙げられます。個人レベルでも、まずあなたの家族、友人、職場、居住コミュニティへと範囲を拡大し、そうした行動を促していくような活動を起こしてはどうでしょうか。

しかし、そうはいっても、人々に行動を促すことは容易なことではありません。まず人々を説得しなければならない。人々を説得するためにはまず、その活動の良い面を彼らに示さなければなりません。その活動によってなにも金銭的な報酬は得られないとしても、精神的にプラスになるということを見せなければなりません。そのとき、一人一人が、今こうして自分がいられるのは誰のお陰

かを考えるべきです。それは、私たちの周りのお年寄りの方々のお陰です。今度は、私たちがその恩を返すべきです。このような話し合いを根気強く続けていくべきです。人々は馬鹿ではありません。全ての人が誰かしらの世話になって成長し、大人になったことは紛れもない事実です。それをこうした活動を通して人々に思い起こさせなければなりません。そこで人々は気づき『ああ、本当だ。その通りだ。私たちはお年寄りをもっと大切にしなければ』と思うでしょう。このように人々の道徳心に訴えるべきではないでしょうか。

中川：しかし、日本の多くの家庭は核家族です。このような状況において、私たちは具体的にどうすべきでしょうか？

ラミン：もしおじいちゃん、おばあちゃんが元気なら、彼らだけで暮らしていくのに何の問題もない。私たち若い世代は、ときどき彼らの様子を見にいけばいいでしょう。問題は、彼らがさらに年老いたり、病気になってしまった場合です。その時、多くの人は、おじいちゃん、おばあちゃんの世話をするのを『めんどくさい』と感じてしまう。そうですね？でも、その『めんどくさい』という考えは捨てるべきです。おじいちゃん、おばあちゃんが、もはや一人では生きていけなくなったとき、彼らを家庭に受入れ、一緒に生活するべきなのです。それを当たり前のこととして社会が受け入れるべきです。とても重要なことです。

現代の日本社会においてはお父さん、お母さん、子どもという核家族が普通のことになっていますが、それをお父さん、お母さん、子どもとおじいちゃん、おばあちゃんという形に変えていかなければならない。日本社会の根幹となる家族の形を変えようとするのですから、あなた方のような研究者や専門家が社会に発信していくべきでしょう。この社会の変化をもたらすことは、それほど難しくはないと思いますし、膨大な予算を必要とするような類のものでもありません。もし膨大な政府の予算を必要とするような大きな変革であるなら、それはとても時間がかかるものです。ただ必要なのは、日本人ひとりひとりの努力です。そのために、人々に理解してもらうことが必要ですし、それを行うのもあなた方の役目なのではないでしょうか？これが、あなた方が投げ掛けた質問に対する答えです。

お年寄りが人の助けを必要とする、そういう時期に達したとき、施設ではなく、各家庭で彼らを受け入れるべきだと思いますが、もしお年寄りがそれを望まず、施設で暮らしたいというなら話は別です。

佐々木：でも多くのお年寄りは『子ども達に迷惑を掛けたくない』と感じて、施設に入ることを自ら選んでいるのではないのでしょうか？

ラミン：それは違うと思いますよ。彼らは、子どもたちの『めんどくさい』という心の内面を読み取ってそう言っているだけでしょう。お年寄りはみな賢い。だから人の目を見れば、その人が何を思っているのか分かるのだと思います。それが自分の子どもならなおさらです。子ども達への愛情表現でしょう。彼らは、子ども達のために自らの人生を犠牲にしてきた。そして、彼らの一生を通して様々なことを私たちに教えてきてくれました。私たちにとって親は、一番最初の教育者です。彼らから学べることは尽きません。たとえ彼らが年老いても、私たちは彼らから多くのことを学ぶことができます。それは彼らの経験からくるものです。それは学校で学ぶことのできないものです。私たちはまだまだお年寄りの知恵や経験が必要なのです。そういった意味でも、お年寄りを私たちの社会できちんと受け入れるべきなのです。

佐々木：なるほど。その通りだと思います。

ラミン：これが個人レベルで私たちができることです。日本で素晴らしいと思うことは、メディアが発達していることです。これらを人々の啓発に活用することができます。それらを使うことで、多くの人々に働きかけることができます。例えば、遠隔地で自ら働きかけることができないような地域において

も、メディアを使えばそれが容易になる。ニジェールでは、確かに街ではテレビが普及していますが、放送される内容は決して意味がない。人々も、あまり重要視していないし、そもそも村ではテレビは殆ど普及していない。それ以前に食糧不足という喫緊の課題にさらされている。日本では、ある有名人の言動がテレビで報道されると、翌日には大勢の人々がそれについて話をしていますよね？こうした影響力があるのだから、それを利用しない手はない。お年寄りの話にしたって、メディアに働きかけることでより多くの人々の共感を呼ぶことも可能になります。そのような機会を得て、これまで話したようなことを社会に発信すれば、私は世の中を変えられると信じています。なぜならここではほぼ全ての人がテレビを見ています。これは、私が日本に来て、日々の生活から気づいたことです。

それ以外にも、大学や研究機関等で講演するのも、大衆に働きかける方法の一つです。地域の施設や市役所などを利用してもいい。私が暮らすこの町にも、コミュニティ・ハウスのような施設があります。そこであなた方のような社会学の専門家が話をする、それもあなた方の仕事の一つでしょう？

あなはニジェールの村で、村長の家に皆が集まって話をしているのを見たことがあるでしょ？ああいう場所で、様々なことが決めます。そのような場で、人々は意見交換をし、家に帰ってそこで聞いたことを家族の皆に話す。書籍を出すこと、それも重要なことだとは思いますがそれを読む人がいないと意味がないですよ？でもコミュニティ・ハウス等で直接人々と対話することで、人々の反応も見ることができるし、質問にもすぐに答えることができます。

数年後に何らかの効果が現れると思います。なぜなら日本はそうした物事を決めるスピードがとても速い。そして、それを一つの流行（モード）にすれば、人々は率先してそれを実行するようになると思います。日本人はそうした流行にとても敏感だと思いますから。『昔に帰ろう』みたいなモードをつくってあげればいいんじゃないかな。おじいちゃん、おばちゃんと一緒に暮らす生活は、子ども達にとってもプラスになると思います。これにより、家族の絆が強くなると思います。アフリカでは、一緒に暮らす家族だけではなく、あちこちにいる親戚とも強い繋がりが保たれています。コミュニティ全ての人が、子ども達にとっての「おじさん」「おばさん」という意識があります。

佐々木：たとえばニジェールでは、ガーナにいる叔父さんとか、ベナンにいる叔母さんとか、その繋がりは一国に止まらず、近隣国のあちらこちらに広がっていますよね。

ラミン：それに民族同士、たとえばトゥアレグとザルマは兄弟だ。みたいな言い方もします。だから、例えば、私はトゥアレグだけど、年老いたザルマのおじいさんがいたら、私にだって彼の面倒をみる義務はあるのです。なぜこのようなことが機能するかといえば、アフリカはたくさんの民族がいるからです。だから、民族同士の絆を強めるために、大きく民族間が親戚関係にあるという言い方をするのです。もし日本のような単一民族社会だったらわざわざこんな考え方をする必要もない。民族同士で言葉も違うわけですし、共有するなにかがなければ逆に共生することは難しいことです。

佐々木：もしニジェールがトゥアレグしかいない、日本のような単一民族社会だったら今のニジェール社会のようにはなかったかもしれない？

ラミン：多くの民族がいることが必ずしも紛争の種に繋がるわけではありません。それは理解してください。実際、ザルマだろうがハウサだろうが、どんな民族だろうが、それぞれ共通する社会性、精神性を持ち合わせます。ただ話す言語が異なるので、コミュニケーションをとるためにそれぞれの言葉を学びますが、民族が異なることはそれほど大きな問題ではありません。

佐々木：日本はただ一つの言語、民族であるがゆえ、コミュニケーションをとり、お互い理解することは論理的には容易なはずですが。しかし実際はそうっていないと思います。言葉や民族の壁がないにも関わらず、アフリカ社会のように人々のコミュニケーションはそれほど活発でない。なぜなんでしょう

うか？アフリカでは、たとえ民族が異なっても、少なくとも挨拶はしますよね？

ラミン：挨拶に限らず、異民族間でも普通にコミュニケーションをとります。私たちにとって最も重要なことは、あなたと私、といった個人的なものではなく、私たちが暮らすコミュニティ全体なのです。

佐々木：それはすごくいいことですよね。

ラミン：それでは、逆にあなた方に質問します。なぜ日本はアフリカのように人々がコミュニケーションをとらないのでしょうか？

佐々木：私は4年間のニジェール滞在から帰国して、おそらく半分ニジェール人のようなメンタリティになっていたのかもしれませんが、例えばバスや電車の中で誰も口をきかず、挨拶もしないことにとてもフラストレーションを覚えました。目を合わせようとしません。

ラミン：日本では、バスや電車で席を譲ることは稀ですよ。アフリカなら、まず女性には席を譲ります。そしてバスの中ではいたるところで皆がお喋りをしています。まるで市場のように。

佐々木：私は日本人ですが、アフリカのそういった雰囲気がとても性に合いました。

ラミン：日本にはそういった雰囲気が、残念ながらありませんね。なぜだかわかりませんが、もし、もっと人々がコミュニケーションをとるようになれば、それは全ての人にとってメリットになると思います。

佐々木：そのため、帰国したばかりの私はすぐに『ああ、ニジェールに戻りたい！』と感じました。私の家族でさえ、私がニジェールでやってきたことにあまり関心を示しませんでした。何も聞いてこないのです。そのことがとてもストレスになりました。だから、当時は自分と同じようにニジェールから帰国した隊員とばかり話をしていました。彼らとならアフリカの話が普通にできるからです。それは、帰国隊員の多くが感じる感情です。社会で孤立したような感覚。

中 川：よく分かります。

ラミン：私も同じく、アフリカを出て日本に来て、アフリカとは異なる空気を日本に感じました。あなたは数年アフリカにいて、日本社会に違和感を覚えたと思いますが、私は生まれてからずっとアフリカ社会で過ごして日本に来たわけですから、当然ですよ。

佐々木：そうですね。だから日本にいるアフリカ人の苦勞がとてもよく理解できます。

ラミン：たとえば日本では、アフリカのように隣人でも気軽に知らない人にあいさつはできませんし、子ども一人では遊びに行けません。アフリカなら、隣人の家全てが自分の家のように自由に行き来ができる。普通に道を歩いていても、変な目で見られることもあります。外国人に対して不信感を抱いているように感じます。

佐々木：特にアフリカ人を目にするのは稀なので、余計にそう感じてしまうのかもしれない。

ラミン：そうですね。ヨーロッパとは異なり、距離的にも遠いし、交流もなかった。ヨーロッパとは、奴隷制の時代からですから、100年以上の歴史があります。日本人のアフリカ人への反応は、当然と言えば当然です。なぜなら彼ら（日本人）はアフリカのことをほとんど知らないのですから。

佐々木：それは自然な反応かどうか、私には判断できませんが、例えば私のニジェールの村のお母さんは、人生の大半を村で過ごし、ニアメ（ニジェールの首都）にすら滅多に行かないような人ですが、私が初めて彼女に出会ったとき、日本人がアフリカ人に見せるような反応はしませんでした。彼女はもちろん日本がどこにあるのかも知りませんが、私を家族のように受け入れてくれました。

ラミン：なるほど。で、あなたはなぜ彼女がこのような反応をしたと思いますか？

佐々木：なぜでしょう？でも、今思えば驚くべきことです。

ラミン：それで、あなたは嬉しかったでしょ？

佐々木：もちろんです。だって初めは、彼女たちの話す言葉すら理解できなかったんですよ。それにもかからず、彼女は私を娘のように迎え入れてくれたのです。

ラミン：そもそも人間は、国籍はなんであれ、人間自身についてすら、よくわかっていませよね。人間はど

これから来たのか、一人で、あるいは集団で、突然現れたのか…それを哲学と呼ぶのかもしれませんが、これらの疑問に答えられたなら、ひとりひとりが皆同じでないということが理解できるのだと思います。あなたを優しく迎え入れてくれた村のお母さんは、アフリカ社会の宗教的な側面をよく表しています。つまり神（アッラー）の存在です。神は自分だけではなく、全ての人間をこの世に創った。この世に存在するもの全てが神の創造物です。そのため、すべての人は皆同じ、平等です。だから、たとえ全然知らない人であっても、自分と同じように接するべきなのです。このような考えを言い得た諺があります“Bakonka Allanka”（ハウサ）「あなたのもとに来たお客さんは、神と同じ」なぜなら、「神」という概念は精神面で非常に強い力をもっています。つまり、お客さん（異人）は、「神はあなたと同じように異なる人々をこの世に創った」ということを思い出させる存在であるのです。そして、あなたと同じく神はそのお客さんを含むすべての人を等しく愛しています。だから、たとえ知らない人でも、大切に、親切に接しなければ、神からの罰が下されると考えています。神を畏れるのと同じく、異人を畏れ、敬意を払わなければならないのです。彼らは神の存在を、異人の中に感じているのでしょう。このような考えがアフリカ社会一般にあります。肌の色や国籍に関係なく、彼らにとってお客さんである以上、そのように接しなければならないのです。彼らは来訪者を歓迎するのには、こうした宗教的、精神的な意味があるのです。

社会的な背景もあるでしょう。私には一人の子どもがいて、彼女を教育する義務が私にはあります。私は彼女に、肌の色、言葉の違いに関係なく人間は皆平等だと教えます。そのような教育を受けた彼女がこの先、アフリカ人に出会っても、自分と同じ一人の人間としてみることができるよう。それに対して、アフリカは様々な病気が蔓延していて、犯罪が横行しているとか、動物のような原始的な暮らしをしているとか、そんなイメージを持っていたとしたら、実際にアフリカ人に出会ったらそういう目で見てしまうでしょう。これは仕方のないことです。そうしたイメージがそのような人の反応を生み出してしまうのですから。アフリカ人に対する拒絶感は、なにもその人が意地悪でそうしているわけではなく、心理的に、自動的にそう反応してしまう当然の帰結でもあるのです。それは大人にも言えることですし、子どものときの記憶、教育でその後の人生が決まると言っても過言ではないでしょう。

佐々木：日本にもそんな諺がありますよ「三つ子の魂百まで」ってね。

ラミン：日本でテレビを見ていると、時々アフリカが出てきますが、いつもエチオピアかどこかの非常に特殊な民族が映し出されます。あなたはニジェールでこうした人々に出会ったことがありますか？日本人にとって、エチオピアだろうがニジェールだろうが「アフリカ」なのです。その他、戦争、飢餓、エイズ、サルを食べるなどなど、例を挙げればきりがありませんが、このような悪いイメージばかりが脳裏に植え付けられて、どうしてアフリカ人と親しく付き合うことができるのでしょうか？それは無理な話です。

佐々木：日本のマスメディアがこうした「アフリカ」を作り上げているんじゃないですか？

ラミン：メディアが作っているかどうか、私には分かりませんが、ただいくつか例を挙げたまでですよ（笑）

佐々木：だから、その結果がこれですよ。

ラミン：とにかく、アフリカ人は日本社会では決してよくは見られてないと思います。それはどこへ行ってもそうです。日本には、アフリカ人が信じるような宗教が存在しない。生前行ってきたことによって、死後の神による審判が下るという考えがない、つまり神への畏敬の念がない。私は日本にいても、やはりそうした信念は持ち続けています。だから神を畏れているし、私たち人間は皆同じ、平等だと考えていますし、お客さんは敬意を持ってもてなすべきだと思っています。

しかし、だからといって日本を非難しようとは思いません。そのようなアフリカに対する偏見はさて置き、外国人を差別するような法律はありません。もしそのような差別的な制度があれば声を

大にして抗議しますが…とにかく、日本人の考えが人種差別的であったとしても、日本が人種差別の国ではないことは確かです。ここでフランス語のレッスンをしているとき、ときどき「アフリカにはテレビはあるの?」「車は走ってるの?」など聞かれたりします。こういう質問を投げ掛ける人たちを非難できるのでしょうか?でも、あなた方のようにアフリカに実際に行って、現実社会を目にしてきた人なら分かるでしょう。アフリカへ一度も行ったことがない人と、そこへ実際に行った人とはそういった意味で大きく異なります。

一方で、私自身も日本についてもっと知る必要があると思っています。なぜなら外国人が異国で生活するためには、その人自身に責任が伴います。そして、故郷と同じく受け入れてくれた国に対しても敬意を払わなければなりません。とても重要なことです。さまざまな障壁もあるかもしれませんが、とにかくあなたを受け入れてくれたのですから。もし敬意を払わないなら、それなりの代償を払うことになるでしょう。その代償が降りかかったときに、自分のことばかりを考えがちですが、その代償はあなたのまわりの全ての人に及ぶことを忘れてはなりません。私は幸運にも、ここで素晴らしい人たちに囲まれて、とても幸せに暮らしていますが、もし何か悪いことをした場合、まずその代償は自分自身に返ってきます。それと同時に、あなたの暮らす家族、コミュニティにもその影響は及びます。さらにそれは、あなたの出身国、ひいてはアフリカ全域に及ぶことになるのです。残念なことに、全く無関係なアフリカ人の心ない行為が、私自身にも、そして日本で暮らすアフリカ人全員に悪影響を及ぼしています。それに対して、私は何もできません。実際にそのようなことが日本で起きています。大変残念なことです。

ここで具体的な国名を挙げることは控えますが、酒を飲ませて相手の所持品を盗むとか、日本人妻と子を残してそのまま姿をくらますとか、こういうことがよく起きています。あるいは店で物を盗むとか、確かに日本社会で就ける仕事は楽ではありませんが、仕事が見つかっただけでも幸運だと考えなければなりません。それで食べていけるだけのお金が稼げる。少なくとも飢え死にすることはない。真面目に働く代わりに、安易な犯罪に手を染めれば、待っているのは監獄です。しかし、それだけで問題は解決しない。その行為により、多くの人々に汚名を着せることになるのです。そういう事件が度々ニュースになっていますよね。問題は、その後なのです。私も彼女と結婚する前は、彼女の両親に反対されました。アフリカ人が日本で娘を養えるのか、変な病気をもってるんじゃないか、騙されているんじゃないかといった理由からです。あるいは、テレビから得たアフリカ人に対する偏見から、日本社会に順応できないんじゃないか考える人も多くいると思います。それに加えて、日本にいる一握りのアフリカ人がさらにそのイメージを悪くしているという現実があります。その解決方法として、やはり受け入れてくれている日本人、日本社会そして日本で暮らすアフリカ人に敬意を払い、自分たちの行動のひとつひとつに責任を持つことです。

佐々木：それは誰にでも言えることです。アフリカ人に限らず、私がニジェールに行って、そこの人々に敬意を払い、自分の行動に責任を持つ、それがひいては自分の家族、コミュニティ、日本に返ってくるからです。

ラミン：ニジェール人は外国人、特に日本人にいいイメージを持っています。フランス人に対しては、やはり歴史的な背景から反感を持つ人も多いですが…ニジェールと日本は、過去にそのような関係はない。それに、日本人がニジェールで何か悪いことをしたなんて聞いたことがない。ニジェール人の持つ日本人のイメージは概していいものです。日本人はニジェールの村や町に溶け込み、人々を助け、そしていつも笑顔でいる。でも、中国人は同じく植民地支配といった過去はありませんが、日本人ほどいいイメージは持たれていません。過去の歴史的な繋がりや、人々の性格により、各国のイメージは決まるのだと思います。

農業、環境分野でいえば、稲作の技術や植林の技術など日本人は常に地域の人々に寄り添い、人々

の生活改善のために尽力してくれています。あなた自身、長期にわたって地域の人々のために働いてきたでしょ？それは素晴らしいことだし、ニジェール人だってそれを忘れることはありません。私が小学生の時に、日本から食糧援助が届いて、その時に受け取った魚の缶詰に「日本産」と書かれていたのを覚えています。そのとき日本という国名を初めて知りました。その魚がなんなのか分かりませんでしたが、友達の間では「日本の魚」と呼んで、皆が大好きでした。そのとき同時にイタリアからも魚の缶詰が来ていましたが、トマトソース漬けで全然美味しくなかった。皆日本のを食べたがりました。

翻って、私たち外国人は日本に来て日本のために何ができるでしょうか？学校を建てる必要もないですよ。そうではなくて、日本に来た私たちができること、それは日本に敬意を払いながら穏やかに暮らしていくことです。少なくとも、何かを破壊したり、誰かを傷つけたりするようなことはやってはいけません。

佐々木：それは確かにいいことだとは思いますが、私が最初に話をしたように、あなた方アフリカ人が日本社会に貢献できることはたくさんあります。例えば、今こうして話をしてくれていることは、素晴らしいことです。まだ具体的なことは決めていませんが、私たちアフリカをフィールドにしている研究者が人々に話をする 것도 大事ですが、アフリカ人自身が私たち日本人に向けてこうしたメッセージを発信すること自体、とてもインパクトがあることだと思います。

実際、私のアフリカ人の友人が来日したとき、大勢の日本人は彼の話に熱心に耳を傾け、彼の洞察力に感銘を受けていました。そして今こそ、こういった話が私たち日本人には必要なんだと思います。なぜなら日本社会は様々な意味で病んでいます。なので、こうした機会を何とかしてつくりたいと思います。

ラミン：とにかく私はいつでも話をする準備は出来ています。ここでも、時々手作り市などイベントを開催した際に、できるだけ多くの人と話をするようにしています。フランス語のレッスンのあとでも、話をしています。彼らはアフリカについて様々な質問を投げ掛けてくれます。それに対してひとつひとつ答えてはいますが、やはりあなたが言ったように、大勢の人に直接語りかけることが一番の解決策だと思います。そのような機会を待っています。現代の日本社会の病巣を取り除くためにも、こういう機会を是非つくりましょう。私にできることは何でもやります。

佐々木：多くの日本人はとても感銘を受けると思いますよ。なぜなら、多くの人はアフリカ人がこのように論理的、客観的に日本社会を分析しているなんて想像もしていないと思いますから。

ラミン：私はいつでも、どこでも準備ができています。このような機会をつくってくれて本当にありがとうございます。このような意見交換が、お互いにとって最善の解決策を生み出すのだと思います。そしてこれはまさに今の日本社会にとって必要なことだと思います。私は、今年の5月に日本で暮らすニジェール人会を立ち上げました。現在メンバーは10人で、私とその代表です。

中 川：女性も男性もですか？

ラミン：全員男性で、皆日本人女性と結婚しました。その組織を承認してもらうために、日本の領事館に手紙を送り、返事ももらいました。来年に向けて、ニジェールと日本を結ぶ様々な活動を考えています。ニジェールの要人を日本に招いてシンポジウムみたいなものを開催するのが今の目標です。

■ 考察

日本における高齢化社会の問題を切り口に、ニジェール人の目線から貴重な意見を聞くことができた。さらに話は高齢化問題に止まらず、ニジェールの文化や伝統、ニジェール人の宗教観、国家観や日本人のそれらとの比較など多岐に渡った。以下、対話の記録を考察を交えながらまとめてみたい。

ニジェール社会と日本社会 ―高齢化社会について考える前に知っておくべきこと―

ラミン氏は日本の高齢化社会の問題を先進国故の問題としつつも、その根本の原因を社会的価値観にあるとした。ニジェールの、特に農村社会では今日においても伝統的な文化、精神的価値観が社会に根付いている。そして、それを人々が信じる神話や教義（ドグマ）と表現し、現地の諺を例に分かりやすく説明している。その一つが、“Boro Zeno, Borokulu wone no”（老人は皆の財産だ）という概念。これが人々の生活規範となり、老人の世話をすることが当然の責務と捉えられている。ただ都市の生活は、資本主義経済、物質主義の影響で変わりつつあるという。それにより都市に暮らす人々の行動は幾分制限されている。しかしそれが彼らの精神世界にまで及んではないとした。そのいわば拠りどころとなっているのが、イスラームである。日本社会では、このような精神的な価値観、イスラーム的な概念が決定的に欠如しており、これが日本の高齢化社会の問題を一層困難なものにしている。

コミュニティの一員であることの意味

“Moutoun ba mutani banzani”（仲間がいない人はなんの価値もない）。コミュニティの一員であることの意味を端的に表現した諺をまた一つ紹介してくれた。それは裏を返せば『人はひとりでは生きては行けない』ということだろう。それを積極的な意味で捉え、誰か困っている人がいれば進んで手を差し伸べるという行動規範になっているようだ。このような規範が自然に醸成される土壤が、農村社会には今もしっかりと残っている。アフリカの農村における女子の早婚は、欧米社会では女性の人権の侵害と捉えられ問題視されることの一つだろう。しかし、ラミン氏の話の聞くと、それがニジェールの伝統に則った、ある意味理にかなった儀式であることが理解できる。若くして結婚し、嫁いだ先の家族（特に姑）から新たな共同体の一員として生きていくということの意味を学ぶのである。

私自身、ニジェールの農村における2年間で結婚という儀式や初々しいお嫁さんたちを数多く目にしてきた。そこには、「若くして無理やり結婚させられた哀れな少女」はどこにもおらず、新たな家族として迎えられた花嫁が姑と仲良く家事を行う微笑ましい姿があった。日本でよく聞く、嫁姑の確執の片鱗すら見当たらなかった。このような観点から鑑みれば、ニジェールの農村における結婚にはコミュニティ的、社会的要素が非常に強いというのは頷ける。日本人や欧米人が考える「結婚」とは、ある意味切り離して議論する必要があるだろう。物質的なものの導入によりコミュニティの細分化が一見起こっているように見える都市においても、強固な精神的繋がりによってそれが揺らぐことはなさそうである。

日本の高齢者とニジェールの高齢者

翻って日本社会の高齢者をとりまく環境は、ニジェールの観点からみれば理解に苦しむほど異様に映る。ニジェールでは基本、高齢者の面倒は家族がみるため、日本とはまずその前提が異なる。家族ではない、いわば他人に身の回りの世話を頼まなければならない、そのサービスを受けるための対価も当然払わなければならない。核家族化が進む日本社会において、年老いた親の面倒を子がみるということは、子にとっては義務というより重荷であり、親にとっては『子供に迷惑を掛けたくない』という遠慮があるため、人々は老後に備えて一生懸命働く。

住み慣れた家を離れて施設などに身を寄せる高齢者の精神的な苦悩、フラストレーション、あるいは疎外感に苛まれることは目に見えている。このような精神的ストレスを感じさせないために、ニジェールにおいて高齢者の世話はすべて家族が引き受け、心穏やかな余生を過ごす環境を皆でつくっている。実際、農村で調査などをしていると、常に大勢の孫やひ孫たちに囲まれながら木陰で日がな一日過ごしている老人をよく目にする。そのような微笑ましい光景に遭遇するにつけ、心癒される一方で、自国の現状を憂うもうひとりの自分にも対峙することになるのである。

ニジェール人的「日本人」分析

ここまでは日本社会の高齢化の問題に焦点を当ててきたが、客観的にみれば日本人にも優れた点はたくさんあるとラミン氏は断言する。その特徴を1) 順応性、2) 規律、3) 愛国心という言葉で表現した。1) の順応性は、日本人が何か新しいモノや技術に遭遇した際、それを瞬時に取り込み、技術であればそれを再現し、それよりもさらに優れた技術を生み出すことである。それは3) の愛国心にも通じるものがある。そして、2) の規律とは、規律を重んじる人々という意味である。このような順応性が育まれた背景には、自然とうまく調和しながら生活してきた歴史が挙げられる。数々の自然災害を経験しながら人々は知恵を出し合い、自然に順応する術を身に付けてきたのだろう。3) 愛国心の強さは、ニジェールの社会コミュニティの強さと共通するもので、『日本人』というアイデンティティはとても強いと感じられるようだ。アフリカはその歴史的背景から、国家形成の過程でその機会を奪われてしまったので、この愛国心という日本人の精神がより際立って見えるのかもしれない。

このような特徴を捉えた上で、日本社会に合った高齢化社会への対応策を考えていく必要があるだろう。そこでラミン氏がそのヒントとなる例を挙げてくれた。規律を重んじ、かつ順応性の高い国民性であるなら、その教育課程にお年寄りを大切にするという考えを盛り込んではどうか。いいか悪いかは別として、小学校の教育課程において道徳を教科化するという動きが出てきている。もしそれが現実のものとなるなら、『アフリカ社会から学ぶ』という項目を是非加えて欲しいものだ。

まずはできることから

高齢化が今後益々進む中で、私たちはこの問題とどう向き合っていけばよいのか。この問いかけに対するラミン氏の答えは至ってシンプルだ。「先ず隗より始めよ」。アフリカでの経験を活かして、まずあなた自身がアフリカ的なアプローチでお年寄りに接してみてはどうか。それが日本社会で機能するか否か、まず私が実践してみる。幾分、虚を突かれた形ではあったが、確かに個人単位でも行動に移すという努力が必要だろう。家族、友人、職場、居住コミュニティへとその範囲を徐々に拡大し、賛同者を募り、その行動の輪を広げていくという地道な活動が必要である。「全ての人が誰かしらの世話になって成長し、一人前の大人になったことは紛れもない事実」という言葉が印象的だった。核家族化、少子高齢化が常態となって久しい日本社会で、その根幹となる家族の形を変えるというのは、容易いことではないかもしれないが、今ほどそれが求められている時代はないだろう。そして「私たちはまだまだお年寄りの知恵や経験が必要だ」ということも忘れてはならない。その貴重な人的資源をうまく取り込んでいくことこそ、今私たち日本人ひとりひとりが真剣に取り組むべきことなのではないだろうか。

使えるツールはすべて使って

このような考えを広く日本社会に浸透させるためには、個人単位の努力はもちろんであるが、より広範囲の人々に働きかけることも必要である。その際に使えるツールはすべて使うべきだとラミン氏は語ってくれた。私たち研究者ができることは、大学や研究機関、一般向けセミナーなどで講演を行い、大衆に働きかけることが可能である。書籍等の出版という手段もあるが、このようなテーマはやはり双方向でコミュニケーションがとれる場を設けることが重要である。また日本社会におけるテレビの影響の大きさを指摘し、とかくモード（流行）に敏感な大多数の人々にテレビやあるいはインターネットを使って訴えてみてはどうか、というアイディアを挙げてくれた（例：『昔に帰ろう！』キャンペーン）。

お年寄りと一緒に生活することは、次世代を担う子ども達にとってもプラスになるという指摘も的を得ている。なぜなら少子化の大きな要因の一つに、共働き世帯の子どもへの安全な預け場所の不足が挙げられるからだ。現在の日本社会は、老人世帯のみならず、共働きの若い世帯にとっても決して住みやすい環境とは言えない。そういう意味では、少子化と高齢化の問題は、いうなれば表裏一体の問題ともいえる。家族の絆や

人と人の繋がりが希薄になっていくなかで、こうした働きかけは閉塞感漂う現代社会に一筋の光をもたらす一助になり得るだろう。

さらにここで新たな人材として挙げたいのが、日本に住むアフリカ人自身の存在である。2014年6月現在、全在日外国人の約0.5%にあたる12,000人（在日外国人統計2014）のアフリカ人が日本で暮らしている。しかし、多くの日本人が抱くアフリカのイメージは今もなお「貧困」「紛争」「感染症」などネガティブなものに偏っており、先に挙げたような農村における人々の暮らしに焦点が当てられることは残念ながら稀である。であればこそ、アフリカ社会における様々な知恵や工夫を彼ら自身に語ってもらう場を設ければ、一定のインパクトを日本社会にもたらすことも可能であると信じている。

アフリカのマルシェのようなコミュニケーションづくり

高度にデジタル化が進んだ現代社会において、コミュニケーションの形もここ数十年で大きな変化を遂げている。携帯電話やスマートフォンの普及によりその速度は一気に加速したように見える。そして、日本に初めて訪れるアフリカ人の多くは、その異様さに衝撃を受ける。4年間のニジェール滞在から戻った私ですら、それに違和感を覚えたほどだ。バスや電車といった公共空間に居合わせていながら、人々は個々の持つバーチャル空間にどっぷりと浸かっている。挨拶どころか目すら合わせない。これがアフリカだったら絶対にこうはならないだろう。公共の場所で人と人が出会えばどこでも、長い挨拶から様々な会話が繰り広げられる。市場に入ったら最後、お喋り好きなおばちゃん、おじちゃんが次から次へと会話を畳み掛けられ、さらに話の輪は広がっていく。

日本でもかつてはこのような血の通ったコミュニケーションがいたるところで普通に取られていたのだろう。残念ながら、そのような時代を私は知らないけれども、その良さを幸運にもアフリカで再発見することができた。この賑やかで人情味あふれるアフリカン・マルシェ的なコミュニケーションをまずは自分の身の回りから再現していきたい。

最後に私自身の所感を述べれば、上記のように話題が広範囲に及び、時に抽象的概念をも含むような難しい内容であっても、表面的、一時的な考察に止まることなく、かつそれを分かりやすく説明して頂いたことに深い感銘を受けた。何よりその洞察力には目を見張るものがあり、たった3年という日本滞在中にして日本人の内面的な部分をも理解しているように見受けられた。ここで得られた貴重な談話をたった一回の座談会で留めることなく、今後ラミン氏自身が語るように、日本とニジェール社会双方にとって有益なものにしていければと考えている。

■ 謝辞

この座談会は、2014年機構長裁量経費・研究部事業、TD活動提案「TDをお題とする座談会」（田中プロ・石川プロ）の一企画として実施されたものです。この企画に賛同し、貴重なお時間を割いて頂いたラミン・アルカスムさん、牧野佐千子さん、地球研の同僚、中川千草研究員、紀平朋支援員に心からの謝意を表します。

